

Title	ロゴスとヴィルヘルム・フォン・フンボルトの言語哲学
Sub Title	Logos und Wilhelm von Humboldts Sprachphilosophie
Author	小林, 邦夫(Kobayashi, Kunio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1988
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.52, (1988. 1) ,p.100- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	岩崎英二郎教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00520001-0305

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ロゴスとヴィルヘルム・フォン・ フンボルトの言語哲学

小林邦夫

「ことばとは何か」を考えたときに、私が常に想起する言葉は「ロゴス」という言葉である。少くとも西洋の言語論を論ずる場合は、このロゴスの問題を抜きにしては考えられないのではないか、という印象を私は持っている。フンボルトの言語哲学を読んでみて、私はやはり同じことを感じた。以下、フンボルトの言語観を私なりにまとめたのであるが、ロゴスというテーマのもとに、ロゴスという観点から整理してみた。正直なところ、フンボルトの言語論の全てを論究することはできなかったし、ロゴス概念の全てを網羅することもできなかった。しかしながら、本質的な事柄はおおよそ描くことができたように思う。[()内の数字はフンボルト全集(全17巻)ベルリン・アカデミー版(1903-36)の巻数とページ数を示す]

I. 「神」的ロゴス

「言語は、その本質的な説明は不可能ではあっても、我々の目の前にその姿を現わす自己活動を有している。そしてこの面から観察すると、活動の産物ではなく、自律的な精神の流出である。…言語(die Sprache)を、自己活動を行い、ただ自己の中からのみ生れ出て、神的に(götterlich)自由なものとして表現し、諸言語(die Sprachen)を、拘束されたものとして、これらが属している民族に依存するものとして表現しても、これは決して言葉遊びではない。」(VII-17) この箇所ではフンボルトは、カントの用語である自己活動(Selbstthätigkeit)という言葉と、宇宙の創造を連想させる流出(Emanation)という言葉を用いている。自己活動は本来その説

明が不可能なもので、先験的にそこに存在し、自律的に、自発的に活動を続けるものである。そして、その源を精神の流出として神に委ねている。ことばを、ただ自己の中からのみ生れ出る神的に自由なものと表現して憚らないのである。流出 (Emanation) は、ハーマンにとっても重要な概念で、新プラトン主義のプロティノス、及びはキリスト教にとっては異端視されたグノーシスの言葉でもあるが、フンボルトは他の箇所では見られない、この神秘主義的な言葉を大胆にも使用している。宗教色をできるだけ排し、できるだけ論理的に、実証的に、哲学的に論を進めることを心懸けているフンボルトの論述の中では、この箇所のみがある超絶的な存在としての神を認め、ことばの神的起源を直向から肯定しているように思われる。即ち、「はじめにロゴスありき¹⁾」の宗教的な意味でのロゴスを、直接的な表現ではないが大前提としていると考えられるのである。

フンボルトの言語思想に大きな影響を与えたカントの初期の論文「天体の一般的な自然史と理論²⁾」の中で、カントはニュートン的な自然観に基づいて、宇宙の構造を統一的にとらえ、星雲説といわれる宇宙発生論をうちだしている。通称「カント・ラプラス説」といわれるもので、今日でも天文学、自然史の上で大きな意味を持っているものである。ここで重要なのは、カントは自然科学的に宇宙をとらえながらも、秩序と調和を持った宇宙の背後に、創造者の意志ないし目的を認めている、という点である。このように自然科学が発達する中で、その自然科学と哲学と宗教との接点が求められつつあった時代的風潮を考えると、そのような影響の下で、フンボルトのエルゴン・エネルゲイア概念がうちだされたとしても不思議ではないであろう。それはシェリング風に言えば世界精神 (Weltseele) で、宇宙の進化、生命の進化、人間のことばの誕生と続くエネルギーで、あるところ (精神) を持った力、即ち、ロゴスを想像してみることもできるのである。従って、言語の起源論争に目を移すならば、ズュースミルヒの言語神授説に反対したヘルダーの言語の人間の起源³⁾ とは一見相反するよう思われるが、根本的にはヘルダーもフンボルトも、ロゴスの神的起源そのものを否定したものではないと私には思われる。

その意味では、フンボルトが「言語は人間性の奥底から生れ出てくるものであり、これを民族独自の所産 (Werk) として、また民族の創造物 (Schöpfung) としてみなすことは厳に謹しまねばならない。」(VII-16f.) と述べているように、ことばは我々人間が造ったものではない、ということになる。ここで言う「ことば」、「言語」とは勿論、言語能力ということである。我々のできることといえただ、常に「アプリオリなるもの」に変形を行うのみである。フンボルトは言う、「どのような言語でも、一昔前からある素材を我々の知らないずうっと昔から譲り受けているので、思考表現を生み出す精神的活動は、常に同時に、すでに与えられているもの (etwas schon Gegebenes)⁴⁾ に向けられている。純粹に造り出すのではなく、変形を行う (umgestalten) ののである。」(VII-47)

以上のように、神的なロゴスをフンボルトの著作から充分に読み取ることができるよう思う。

II. 「エネルギー」としてのロゴス

フンボルトのエルゴン・エネルゲイア概念は、彼の著作の中の至るところに浸透し、同一性を導く理論として、彼の言語哲学の中心的な概念となっている。しかしながら、その定義ともいべき文章は、一箇所に集中し、それもごく簡単に表出しているにすぎない。「言語は造り出された死せるもの (ein totes Erzeugnis) としてではなく、むしろ、造り出す働き (eine Erzeugung) としてみなすべきである。事物の関連や意志疎通の手段として作用している事柄はむしろ度外視し、内的な精神活動と密接に関係ある言語の起源とその相互の影響とに立ち帰って考えるべきである。」(VII-44)「言語は、その実際の働きに注目すれば、絶えることなく、その瞬間に過ぎ去ってゆくものである。文字で保存しようとしても、それは常にただ不完全なミイラのようなものになるだけで、それをもう一度再現しようとするならば、実際に声を出して試してみなければならない。言語そのものは造られたもの (Werk: Ergon) ではなく、造り出す働き (eine Thätigkeit: Energieia) である。」(VII-45f.)「言語の真の定義は発生的

(genetisch) なものでしかあり得ない。言語は、即ち、分節音で思考を表現しようと永遠に繰り返される精神の労働である。」(VII-46)

ことばは、フンボルトにあっては、絶えざる活動として、精神の労働として、動的な力として、精神エネルギーとして表現される。そして、言語現象のそれぞれのレヴェルにおいて、精神の活動とその活動によって造り出されたものが区別される。例えば、分節 (Articulation) という事柄が、分節する作用と、その作用によって造り出された音形、即ち分節音とが区別される。

さて、このような「精神的力」の概念は、物理的、力学的で、自然科学的観察に接近した研究姿勢であろう。現代でも、ハインテルは、フンボルトのエルゴン・エネルギーの概念を言語哲学の根本問題であると考え、内省 (Reflexion) の問題を取り上げて、それを、求心的 (zentral) なものと、円周的 (peripher), 或いは線的 (linear) なものの二つを区別し、即自 (an sich) と対自 (für sich) に対応させ、言語が対象を構成することを論証しようと試みている⁵⁾。これはエネルギーの考え方である。また、フランスの神学者で古生物学者のシャルダン⁶⁾は、同様に、動径エネルギーと接線エネルギーの二つを区別し、集中と拡散、昂揚と弛緩といった概念に相当させ、いわゆる精神エネルギーを考えている⁶⁾。

しかしながらローマンは、アリストテレスが用いた古代ギリシャの「エネルギー」の意味に遡って、エルゴン・エネルギー理論を解釈している⁷⁾。「エネルギー」は古代ギリシャでは「エネルギー」や「力」ではなく、「現実化」の意味で、「ある可能性が現実となること」であった。「可能性」そのものは「デュナミス」で、これは「力」とも訳される。従って、エネルギーという言葉の今日的な用法に従って、フンボルトは「言語そのもの」を「力」として理解している、と一般には考えられている点は誤解である。しかし、フンボルトはむしろ、言語を人間に特有な「精神的力」が、その中でそれそのものとして実現し、現実となる領域と考えているのである。即ち、精神の自己実現で、事物の存在の諸相を、具体的な形態をとって、音声と思考力との相互作用の中で明るみに出すことである。

翻って、ことばの誕生を、脈々と続く進化のデユナミス(可能態)としてのエネルギー(力)が、人間に至ってエネルゲイア(現実態)としてのことばとなった、と解釈してみることもできる訳であり、その意味で、ことばを宇宙のエネルギーとして、「エネルギー」としてのロゴスと名付けることもできるであろう。

III. 「理性」としてのロゴス

ヘルダーの *ratio et oratio* (理性即言語)⁶⁾ という概念はそのままフンボルトに受け継がれているように思われる。それは、「理性はことばであり、ことばは理性である」と同じことを繰り返さなければ表現できない理性と言語との相即観である。フンボルトではその理性が様々な言葉で言い換えられている。知性 (*Intellectualität*)、理念、観念 (*Idee*)、魂 (*Seele*)、内的なもの (*das Innerliche*) といわゆる広い意味での精神 (*Geist*) が表現され、理性 (*ratio*, *Vernunft*) を代弁している。フンボルトは、一般に用語に定義を施すことをしなかった人で、その点が批難される点であり、また柔軟で豊かな人間性の理念を展開する証左でもある。さて、フンボルトは「言語はいわば民族の精神の外的発露である。民族の言語は民族の精神であり、民族の精神は民族の言語である。両者をどのように同一視してもしすぎることはない。」(VII-42) と述べ、また「我々は知性と言語とを分けて考えているが、実相においてはこのような区別は存在しない。」(VII-42) と述べている。同様に、「言語は本来、ある無限なる、真に限界のない領域に、ありとあらゆる思考可能なるものの総和に相対している。言語は従って、有限なる手段を無限に駆使する運命を持つ。そして、それが可能なのは、思考を生み出す力と言語を生み出す力が同一であることによるのである。」(VII-99) と語り、「言語は思考を形成する器官である。知的活動は全く精神的で、全く内的で、いわば跡形もなく通り過ぎてゆくものであるが、発話における音声を通して外的にも五官に覚知できるものとなる。この知的活動と言語とは、従ってひとつであり、互いに分かち難い。」(VII-53) と主調している。この「分かち難く同一である」ことの意味す

ることは、即ち、理性そのものとしては存在し得ず、ことばとなって、はじめて理性そのものの存在が明らかとなる、理性としてのロゴスである。理性、或いは精神活動は、言葉となろうとするときに、言葉となったときに理性として、精神としてロゴスとなる、と言える。

さて、試みにギリシャ語のロゴス (λόγος) の語義を調べてみると、項目が A と B との二つに大別されているのに気づく⁹⁾。項目 A の中には：言うこと (Sagen), 語ること (Reden), 話すこと (Sprechen) が出発となり、話す行為、話されたこと、言葉の中に含まれているもの、話される対象として、具体的な事柄が並べられている (例：陳述、論議；発言、主張、文、諺、約束、神託、命令、提案、協定；知らせ、噂、名声、講演；題材、テーマ、出来事、お話...)。項目 B の中には：計算をすること、考量すること、熟考することが出発となり、思考、前提；理性的根拠、理由；顧慮、斟酌、意味、妥当性、価値；関係、比率、類推、方法；思考能力、理性；キリスト教的な意味でのロゴス、神の子イエス・キリスト等々となっている。A は語られた事柄を含めた、語ること、話すこと、即ち、言語であり、B は計算をし、熟慮する思考力であり、精神的な力としての理性である。このことから、ロゴスは、語義的な意味でも、「理性即言語」で表現される何ものかである、と言えることになる。また、言語そのものが、 $A=B$ という論理を可能にすることをその原理とするならば、ここにそれが、「理性即言語」としてのロゴスの中に、論理を誕生させる原理的公式として表わされているようにも思われる。

IV. 「二元性」としてのロゴス

ロゴスを「精神即言語」、「理性即言語」で表現できるならば、そこには相即的な二元性、一元的な両極性が含まれていることが分る。このような関係、「一元であり、二元」、「二元であり一元」という意味での二元性がロゴスの本質を構成しているように思われる。更に、二元性そのものこそロゴスで、二元として顕われるところにロゴスがあるともいえる。ヘラクレイトは、ロゴスに思想的な意味を与えた最初の哲学者であると言われて

いるが、彼によれば、弓や琴の弦は逆方向に働く二つの力があってはじめてその機能が發揮するが、同様に、対立する二者を結合し統一する理法をロゴスと呼んでいる。このような理法は宇宙的な規模において、至るところに働いている対立的なものを結合する力であり、人間においては「言葉」となって響いてくる、としている¹⁰⁾。

さて、フンボルトは、このような二元概念の一元化としてのロゴスの考え方を、「双数論」の中で最もよく展開している。複数であり、また、まとまったひとつの全体を表わす単数として、その両者の性質を同時に分かち持っている「双数」を、フンボルトは次のように説明する。「単数の概念としての二元 (Zweiheit) の概念は、従って、精神の純粋な直観の概念は、これはまた好運にも言語との同質性 (Gleichartigkeit) を有している。」(VI-27)「言語」と「双数」との同質性の洞察である。言語と双数とは同じ本性、本質を持っている、というのである。また、フンボルトは、言語が単に意志疎通のみをその目的としていたならば、双数という余計な、余分な、一種独特な現象は起らなかったであろう、と推論し、そして、語る者の世界観として精神の双数性、即ち純粋な直観としての二元性が、言語に反映している、と見ているように思われる。

「双数」という現象は、「対」を成して自然界に現われる対象の名称として、例えば、二つの性に分割された人間、肉体の対を成して存在する組織、四肢、感覚器官、月と太陽、夜と昼、天と地等、目に見える領域と、命題と対等関係、定立と止場、存在と非存在、自我と世界等、いわば目に見えない領域との二重の領域にまたがるものであるが、フンボルトが行った最も根源的な双数の考察は、「我」と「汝」との結合としての双数の分析であろう。それは、語り出す「我」そのものの中に「我」と「汝」が存在することに根ざしていると考えられる。「話すことの全ては対話 (Wechselrede) に基づいている。それが数人の間で行われているときでも、語り出す人は語りかけられた人を、常に自分自身に、分割できないひとつのものとして対立させているのである。」(VI-25) とフンボルトは述べ、「言語の原初的な本質の中には永遠不易の二元論 (Dualismus) がある。そ

して、話すことの可能性そのものも、話しかけと答えによって条件づけられている。…そして人間は、ただ考えることのためだけでも、「我」に対する「汝」の存在を渴望している。」(VI-26)と観察している。更に、三人称に論を進めると、「二人称と三人称を区別することによって、あらゆる言語の原型を代名詞が表現している。そして、この二つで、本来全てが言い尽されている。なぜなら、この二つは、換言すれば「我」と「非一我」であるからである。「汝」はしかし、「我」に相対する「彼」である。「我」と「彼」が、「内的なものとして、域いは外的なものとして知覚することに基づいているが、「汝」の中には、自発的に選択する余地がある。「汝」は、また、ひとつの「非一我」でもあるが、「彼」のようにあらゆる実体の領域にあるのではなく、他の領域、つまり働きかけることによって生じた共通の行為を基礎とする領域にあるのである。そして、これは、ただ単に両者のうちのひとつに相対しているばかりか、両者にも相対している。」(VI-26f.) このように、「我」と「汝」との双数、「我」と「彼」との二分法 (Dichotomie) を幾重にも重ねて繰り広げていったものが、実際の言語となるといえる。言語は、フンボルトが言うように、徹頭徹尾対話の構造であり、双数の概念であり、永遠不変の二元論としてのロゴスなのである。

V. 「関係」としてのロゴス

フンボルトの観察した「我」と「汝」との対話を、マルティーン・ブーパーは更に厳密に分析し、深く冥想的に語り出している、「はじめに関係あり」(Im Anfang ist Beziehung) と¹¹⁾。これは明らかに、新約聖書の「はじめにロゴスありき」のブーパー的な思い切ったロゴスの解釈であろう。フンボルトの言語哲学を更に深めたものとして、次にブーパーの言葉を見てみたい。「子供がまずはじめにある対象を知覚し、次にたとえば自己とそのものとの関係づける、といったことは決してなく、関係への本能 (das Beziehungsstreben) が最初である。それは相対するものを握もうと伸した手である。そのものとの関係、即ち、「汝は…」と言う前の言葉のな

い階段は二番目である。しかしながら、「事物となること」はその後の所産で、原体験から別かれ、結合した相手と分離することから生じてくるものである。——ちょうど「我となること」と同様に。はじめに関係あり。即ち、それは存在の範疇として、準備、前形式、精神形態としてであり、関係の先験性 (das Apriori der Beziehung) であり、生れながらにして備わった「汝」である。」「まず関係がある」こと、「関係への本能」として、先験的に関係があること、それは二元性としてのロゴスの別の名称であるといえる。言語の二元性、人間の精神の奥底に潜む二元性が否定できぬものとするならば、とりまなおさずそれを、「関係」として表現できるのである。プーバーによれば、更にその「我」は、「我」そのものとしては存在せず、「我一汝」の「我」と、「我一それ」の「我」が存在するのみで、人間の「我」の二重性を観察している。従って、「我」を二つ区別して、「我一汝」の「我」と、「我一それ」の「我」を異るものとしている。フンボルトでは、先に見てきたように「二人称で、本来全てが言い尽されている」となっているが、プーバーはそれを、「我」の二重性として、「我一汝」の関係と、「我一それ」の関係との、関係の関係として表現していることになろうか。フンボルトの言うように、人称をこのように区別することによって、あらゆる言語の原型を代名詞が表現している訳であるが、ここに端を発して、単純な事物の認識から複雑な実際の言語表現へと言語活動は拡大してゆくのであろう。

このような関係は、文のレヴェルにおいても様々に表現される。フンボルトは、動詞、接続詞、関係代名詞と章を分け具体例をふんだんに盛り込んで説明しているが、他の箇所でも容易に気がつく事柄である。即ち、ことばはあらゆる意味において、関係を表現するものである。それを「関係」としてのロゴスと呼ぶことができる。

VI. 「総合」としてのロゴス

言語は、関係に基づくものであり、関係を表現するものであるならば、それはまた、それぞれの部分をひとまとめに結びつける「総合」という働

きでもある。

「はじめから言語の生成は総合的行為である。即ち、最も純粹な意味における総合的行為で、結合したそれぞれの部分のいずれもが持ち合わせていないあるものを、総合 (Synthesis) は創り出すのである。」(VII-94) この総合という考え方もフンボルトに特徴的で重要な概念である。「総合とは、ある状態ではなく、またある行為ですらなく、現実に行為が瞬間的に過ぎ去りつつあるそれそのものであるので、この総合にとっては、言葉を示す特別なしるしは存在しない。」(VII-212) と述べていることから、総合の活動は発生的で、エルゴン・エネルギー理論の別の角度からの捉え方であるといえる。その意味ではこれを、「総合」としてのロゴスと名付けることができよう。ロゴスの、関係を結びつけひとつにし、またそこに新たなものを生み出す働きである。ことばに内在する総合的な力である。総合の現存在は非物質的に言語において顕現することを、フンボルトは、語根と接尾辞とからなる名詞の場合を例にとって説明している。「接尾辞はその名詞の範疇と概念との関係を示す素材である。総合的活動は、しかし、これによって直接言葉を発話する際に精神の中でこの置き換えが実際に行われる訳であるが、その言葉そのものの中では、何らの特徴あるしるしは有していないのである。その言葉の存在が顕現するのは、接尾辞と語根とが溶けこんでしまったその互いの統一と依存とによってである。」(VII-212)

このような接尾辞と語根の融合にみられるような総合を、フンボルトは「稲妻のように自らを照し出し、結びつける素材を未知の国の炎のように溶かしてひとつにしてしまう。」(VII-212) という比喩を使っている。この譬は、自然現象を映し取ったものとして力学的、物理的である。この点もフンボルトの言語理論に特徴的で、エネルギー、球体、光、結晶等、自然科学的色彩が随所に感じられる。しかし、ここで用いられた「稲妻」と「炎」には古代ギリシャ人のロゴス観を窺うことができるように思う。ヘラクレイトスの哲学において重要な役割を果たす、ロゴス、神、火の三者は、ストア派に至って意識的に統一され、ロゴスを火とみなしている。ギ

リシャ神話において稲妻の神でもある主神ゼウスは、ロゴスと同一視されるようになる。いわゆる「正しきロゴス」で、宇宙の秩序であり、天体の運行や自然界の機能を支配するものでもある。

さて、フンボルト自身の言葉に戻ると、総合の働きは、稲妻のように瞬間において自己自身を照し出し、そして、炎のように全てを溶かしひとつにし、自己自身が燃焼するものであろう。このような総合が、語と文のレヴェルにおいては、「語は、文においても、ずらずらと並んだ語群の意味する文意を認識できるように、そのアルファベットの組み合わせを意識することなく、部分に分割できない全体として受け取られる。」(VII-57)と説明されることになる。

VII. 「類推」としてのロゴス

「言語の普遍的に一致する範囲内での個性化は何とも不可思議で、どんな人間もそれぞれ特定の言語を持っている、と言っても正しく、また、全人類はたったひとつのある言語 (Eine Sprache) しか持っていない、と言っても正しい。」(VII-51)「あるひとつの言語」とは、人間に普遍的に置かれた、思考と言語とを結びつける働きとしての「思考能力」としてのロゴスであり、あらゆる人間の中で、それそのものとして同一の「言語能力」であろう。しかしながら、この「能力」は「普遍的な自然の、ひとつの制限として」(VII-24)、個々の人間、それぞれの民族がいやが応でも進まなければならない個性化の路を辿ることになる。そして、同じ普遍的な方向の中で、可能な限り独特な進路を辿るその進み方に応じて、自ずとそれぞれの差異が生じるが、フンボルトはその差異性を「もっぱら外的影響と内的な自己活動の占める比重によって決定される。」(VII-40)としている。ここに内的言語形式と母国語の問題がある。この問題についてもフンボルトは、はっきりとした定義を下していないが、あえて言えば、ありとあらゆる要素がまつわりついた、それぞれの民族に特有な言語形式で、現実活動となって現われる言語を内的に規定する形式ということになるであろう。また、この概念は同じ様に解釈する研究家は二人といない、と言われ

る程であるが、ヴァイスゲルバーによれば、この内的言語形式はその言語の概念的な構造と、その統語的な形式化の可能性の二つを基本要素としている¹²⁾。カシーラーの象徴的な言語観¹³⁾を出発点とし、名前の象徴的な機能と同時に、その言語の世界観として、どのように概念形成されるかが決定的な要因となる。その際、ヴァイスゲルバーは、直観的な比較 (anschauliches Vergleichen) によって、類似体験が可能になり、事柄の概念形成と、それに伴う象徴的な意味が獲得される、と考えている。ポルツイツヒは、フッサールの現象学的な言語観を出発点とし、内的言語形式には心理的側面と論理的側面との二つの要素があることを考察し、ある言語共同体の、外的言語形式と相互作用の関連にある、独特な統覚 (Apperzeption) の先験的な形式である、としている¹⁴⁾。そしてその際、意味形式と統覚形式との相関性を意識する唯一の手段は比較 (die Vergleichung) であると考えている。

以上の二つの分析における「比較」の概念は、ロゴスのひとつの名前である。ロゴスはそれそのものとしては存在し得ず、あるものと他のものとの関係において出現するものであったが、その関係には自ずと割合、比率が存在することになる。このことからロゴスは、比較し、類推する能力として「ことば」の内に含まれていると考えられる。「思考力は、それと同じものとそれから分離したものとを必要とする。同じものによって思考力の炎に火が着き、分離したものによって内的な産出活動の本質を試す試金石を得るのである。」(VII-56) とフンボルトは語っているが、それは「人類の普遍的な本性に、個々に感受したことを結びつける」(VII-56) ことであり、思考力の中で、比較し、類推する活動が行われているということであろう。そして、内的言語形式の問題も、その民族に独自の比較と類推作用をその根本的な説明原理として考えることができるように思う。それを私は、「類推」としてのロゴスと名付けることにする。その意味でフンボルトは、「独特な言語音として、同一の言語の中には、必然的に、限無く行き渡ったあるひとつの類推 (Analogie) が支配する。」(VII-60) と述べているように思われる。

VIII. 「生命」としてのロゴス

ロゴスは宇宙と人間を支配する法則である、という考え方から出発すれば、ロゴスをあらゆる生命の根本事実として解する道が開ける。即ち、ロゴスを生命的に、有機的に観る把え方である。「自然におけるあらゆる生成は、特に有機的、生命的現象は、我々の観察の網の目から逃れてしまうものである。我々が様々な状態の予備的段階をどんなにこと細かに研究しても、この状態と現象との間には有と無を分かたず深淵がある。」(VII-39)とフンボルトは警告を発する。我々の研究や分析は、生きた本能の働きを死んだ概念にまとめ上げることにすぎないのである。言語の問題も生命的に見てはじめて釈然とするのを感じる。

カシーラーは、生成的なフンボルトの言語理論の根本思想を、客観性の把握、総合の概念、素材 (Stoff) と形式 (Form) の区別の三点にまとめ、それをカントの思想圏にあるとしながらも、フンボルトの新しい、哲学的な言語の根本把握は、言語科学の新たな姿を要求し、それを可能にしたと評価している¹⁵⁾。なかでも、フンボルトの「言語有機体」(Sprachorganismus) の概念が与えた影響を高く評価し、ボップはその著「比較文法」の拠としている程であると述べている。シャンクヴァイラーは、ヤコブ・グリムとフンボルトの言語論を比較しながら、「言語有機体」の概念が両者に色濃いことを証明しているが、フンボルトのそれは、生理的一動的 (physiologisch—dynamisch) な比較関連において言語を把え、隠喩的な色彩を帯びているとし、自然科学的解釈からも、観念論的解釈からも距離を置いた現実論 (Aktualitäts-theorie) である、と評価している¹⁶⁾。

このような有機的な言語観はフンボルトの著作の至るところに見られる。「言語は思考を形成する器官 (Organ) である。」(VII-53)「内的な言語傾向は、無論、内的な精神力と緊密な関係にある、人間の全有機体の一部分として、同様に、まさに民族の全体的素質と関連している。」(VII-52)「言語の有機体は、死せる質料として、確かに魂の暗闇の中に横たわるものではなく、法則として、思考力の機能を条件づける。」(VII-15)「なぜな

ら、あらゆる言語の有機体は、これはまた、ある普遍的なものだからである。」(VI-121) またそれに代る表現として、「言語に関することは全て、解剖学的ではなく、生理学的に扱い、比較すべきで、言語の中では静的なものは何もなく、全て動的である。」(V-369) などのように、エネルギー理論と共通した動的な機能が強調され、また、「ひとつの全体性の原理」(ein Princip der Totalität) (VII-24) のように、組織の全体にこそことばが求められる。このようなことばを、有機体として、有機組織として、器官として、「生命」のロゴスと名付けることが許されるであろう。

IX. 「存在」としてのロゴス

フンボルトは常に「存在」に目を向けていて、彼の言語論は、いわば存在論としての様相を呈していると言っても過言ではない。「存在」(das Seyn) と「作用」(das Wirken) とを区別して、「前者を目に見えぬ原因として、現象となって現われた思考と感情と行為に対立させるのである。しかし、これは個人のあれやこれやのそのときどきの存在を意味しているのではなく、そのときどきに自らを規定し登場することのできる普遍的な存在なのである。性格の描写を完全に行おうとするならば、その探求の最終点として、この存在を念頭に置くべきである。」(VII-179) とフンボルトは語る。また、サンスクリットを讃美して、「なぜなら、そもそもサンスクリット以外のどの言語でも、動詞(Verbum・ことばの意でもある)の真の本性を、即ち、存在と概念との純粋な総合を、かくも真実に、かくも本来的に言の葉の翼に乗せて表現している言語はないからである。サンスクリットでは、同一のことがらに対して、まさしく決して止まることのない、常に特定の状態を指示する表現があるからである。」(VII-88)、と述べ、名詞では、「象」は二度水を飲むもの、二本の歯を持ったもの、手を一本授けたもの、と様々に呼ばれる例を挙げて、「それは、このことにより同一の対象が意味されているのに、それだけの数の異った概念が名付けられている。なぜなら、言語は決して対象を表現するものではなく、常に精神によって、言語生成の過程で自己活動的に対象について形成された概念を表

現するのである。そして、この形成が、全く内的なものとして、分節的感覚に先行するものとしてみなされる限りにおいて、ここで問題となることば (Rede・語り出す働き) なのである。」(VII-89f.)

このように、ことばは、「語り出す」ことによって、純粹な存在を、普遍的な存在を知らせ、同時に、それぞれの概念を伝えることになる。それは、存在するもの、即ち、存在者を聞き手に覚知させることである。全く同じような意味で、ハイデッガーは、ロゴスの基本的な概念を定義している¹⁷⁾。「ロゴスの根本意義は「語ること」(Rede) で、それは「何かを見せる」(et. sehen lassen=δηλοῦν) という働きを持っている。従って、「語ること」による伝達は、それが語っている対象を公開し、それを他人に近づかせる、という構造を持っている。ロゴスの機能は、あるものを率直に見せること、即ち、存在者を知覚、認知、理解させることであるので、ロゴスは理性、理解力 (Vernunft) をも意味する。」

また、フンボルトは、「古代ギリシャ人は思考や感情の中を駆けまわるのではなく、ただ見て、体験をしたのであり、そしてそれを描写することができた。」(III-197f.) ということを古代ギリシャ人の特徴として挙げ、それを「理念的観照」(das idealische Sehen) と呼んでいる。クラウス・ギールは、このような能力こそ、現実から創造的な力をもぎ取ることができるものであり、その現実化によっては決して変形されない本源性の中で、創造的な力を見させる (sehen lassen) ことができる、と解釈している¹⁸⁾。

さて、現代人にとって、このような「理念的観照」はほとんど不可能と言ってよいが、ここにこそ、本源的な力として、純粹存在を見させる、ということばの源初的な機能が見られる。それを「存在」としてのロゴスと表現してみることもできよう。また、事物の存在を限定する普遍の理法として、「存在」としてのロゴスを認めることにより、フンボルトは、従来の言語理論を言語哲学にまで高めたと言えよう。

X. 「世界」としてのロゴス

「存在」の問題と関連し、前述した「内的言語形式」から生れ、またそれに作用を加えてゆく、いわば内的世界形式とでも表現すべきものとして、「世界把握」の問題がある。「全ての客観的確認には主観性が混じるのは避けられないので、言語の問題は別にしても、それぞれの人間的個性は世界把握 (Weltansicht) のひとつの独特な立脚点としてみなすことができる。そして、個性は言語によって一層世界把握の立脚点となるのである。」(VII-60)

以上のようにフンボルトは、言語が世界把握の立脚点であること、従って、それぞれの言語にはそれぞれ特有な世界把握があることを看取している。ハイデッガーの「世界内存在」に先立つ言語観として、近代的、かつ画期的である。

しかしながら、ヴァイマンによれば、個々の言語における世界像の形式の理論は萌芽の形ですでにペイコンに見られ、更に、ロックにあっては、しっかりとした世界像理論 (Weltbildtheorie) となり、言語は、諸世代の経験の堆積から、固定されたひとつの集団主観的世界像として、その言語集団の各構成員に対して、同一の思考形態へと強制する力を持つ、としている¹⁹⁾。しかしながらまた、ヴァイスゲルバーは、フンボルトの内的言語形式を世界を言語的に変えて獲得する様式であると考え、動的な観点から精神形成的な力を見ているのに対して、フンボルトの世界把握を静的な観点から、言語的な中間世界を概観する目的を持って、言語の内容的構造を意識すること、としている²⁰⁾。更にまた、世界像 (Weltbild) と世界把握 (Weltanschauung) とは取り違えてはならないとして、ギッパは、ある言語の世界像はひとつの人類学的な根本現象であって、ある言語共同体に属する者にとっては、人間の世界把握と精神的な世界内存在の共通の出発基盤である、と注意している²¹⁾。

ところで、フンボルトは「世界把握」を表わす言葉として、Weltansicht, Weltanschauung, Weltauffassung と使い分けてはいるものの、

同一の内容を表現しているものと思われる。「このように言語を、世界把握 (Weltanschauung) として、或いは思考結合としてみなすことが許されれば、言語はこの二つの方向を自らの中でひとつにするので、言語は必然的に、常に人間の力全体に基づいている。言語は全てを包括するので、言語から排除されるものは何ひとつとして存在しない。」(VII-40)「語の意義に即して熟考を重ねて初めて、明瞭に、民族により異った世界把握 (Welt-auffassung) の性格が発見される。…各個人の中には、別の言葉で再び区別しようとしてもできない何かがあるのであり、幾つかの言語における言葉には、それがたとえ全体として同じ概念を指していても、決して真の同意語とはならない。」(VII-190)

以上を総括すると、フンボルトの世界把握の概念に含まれていることは、言語によって、世界の事物を純粹に映し出すことではなく、存在を人間の意識の中に精神的に移し変えることであり、人間が世界の中へ入り込むひとつの可能性であると言える。そして、そのことによって世界が言語によって開示されるのである。このような意味で、言語は世界となり、世界は言語となる。従って、世界はロゴスであり、世界の中の全てはロゴスとなる。人間は、そのロゴスのおかげで、肉体の牢獄から存在の真実に到達することができるのである。フンボルトは語っている、「なぜなら、言語もまた、独自の創造的な働きとなって我々の目の前に顕われるときには、具体的な現象の領域を越えて、その形を失い、あるひとつの理念的存在 (ein ideales Wesen) に変化するからである。」(VII-42) また、ループレヒトは、フンボルトが二通の手紙の中で用いた「乗り物」(Vehikel) という言葉に注目し、フンボルトの言語論の分析の手懸りとしているが、ループレヒトによれば、フンボルトは、人間の本性と活動の全ての細かな部分において、それそのものとして同一である共通のものとして、また、従って、人間が人間の認識のために世界をかけめぐる「乗り物」(Vehikel) として言語を再発見したのである、と評している²²⁾。Vehikel という言葉はヘルダーも用いている用語で、「手段、表現・伝達手段」の意味にも使われるが、私も、まさに、ことばは世界を把握するための乗物であると思う。

注

- 1) 新約聖書, ヨハネ伝冒頭。
- 2) I. Kant: Allgemeine Naturgeschichte u. Theorie des Himmels.
- 3) J. G. Herder: Über den Ursprung der Sprache
- 4) a priori のドイツ語訳と考えられる。
- 5) Erich Heintel: Einleitung des Herausgebers. In: J. G. Herders Sprachphilosophie (1964).
- 6) テイヤール・ド・シャルダン: 「現象としての人間」, みすず書房。
- 7) Johannes Lohmann: Wilhelm v. Humboldt und die Sprache. In: Die deutsche Literatur 9 (Osaka / Japan 1963).
- 8) Menge-Güthling: Enzyklopädisches Wörterbuch der griechischen und deutschen Sprache.
- 9) vgl. 3)
- 10) 以下ロゴスに関する説明は: 田中美知太郎著, 「ロゴスとイデア」, 国際大百科事典 (ブリタニカ), 新聖書大辞典 (キリスト新聞社), カトリック大辞典 (富山房), 哲学大辞典 (名著普及会), 大日本百科辞典 (小学館), 大百科事典 (平凡社) 等を参照した。
- 11) Martin Buber: Ich und Du.
- 12) Leo Weisgerber: Das Problem der inneren Sprachform und seine Bedeutung für die deutsche Sprache. In: Germanisch-Romanische Monatsschrift 14 (1926).
- 13) Walter Porzig: Der Begriff der inneren Sprachform. In: Indogermanische Forschungen 41 (1923).
- 14) Ernst Cassierer: Philosophie der symbolischen Formen I. Die Sprache.
- 15) vgl. 13)
- 16) Ewald Schankweiler: Zum Wesen und Ursprung der Sprache bei Jacob Grimm und Wilhelm v. Humboldt. In: Wissenschaftliche Zeitschrift der Humboldt-Universität, Berlin (1965).
- 17) M. Heidegger: Sein und Zeit.
- 18) Klaus Giel: Die Sprache im Denken Wilhelm von Humboldts. In: Zeitschrift für Pädagogik 13 (1967).
- 19) Karl-Heinz Weimann: Vorstufen der Sprachphilosophie Humboldts bei Bacon und Lock. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 84 (1965).
- 20) Leo Weisgerber: Innere Sprachform als Stil sprachlicher Anverwandlung der Welt. In: Studium generale 7 (1954).
- 21) Helmut Gipper: Wilhelm v. Humboldts Bedeutung für die moderne Sprachwissenschaft. In: Abhandlungen der Humboldt-Gesellschaft 2 (1968).
- 22) Erich Ruprecht: Die Sprache im Denken Wilhelm v. Humboldts. In: Festschrift für Friedrich Maurer zum 65. Geburtstag. Stuttgart 1963.